

国語科において、児童の主体的な学びを実現する授業改善

— 児童の自己調整を促すための支援を通して —

前橋市立荒牧小学校 赤石 貴郎

本研究は、「児童の自己調整を促すための支援」を通して、「国語科において、児童の主体的な学びを実現する授業改善」を目指すものである。そのために、第4学年で以下の実践を行い、成果を検証した。

【児童の自己調整を促すための支援】

単元の構成を工夫し、1単位時間ごとに児童が自己の学習の状況を振り返り、次時の計画を考えることを通して、つながりを意識しながら学習を進められるようにした。また、児童が友達に相談や質問をしたり、自己の学習の状況を確認したりしながら意欲を持続して学べるように、協働を促す学習形態の工夫をした。さらに、児童が粘り強く学べるように、学習状況に応じた支援の充実を図った。

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説国語編「改訂の経緯及び基本方針」に、「子供たちが、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を推進することが求められる」と示されている。また、「児童に目指す資質・能力を育むために『主体的な学び』『対話的な学び』『深い学び』の視点で、授業改善を進めるものであること」とし、授業改善の三つの視点の重要性も示されている。

これらの視点から自身の実践を振り返ってみると、特に「主体的な学び」の実現に課題があると感じている。これまでの実践では、教師主導で授業を展開しがちであり、児童が自ら課題を見だし、その解決に向かって主体的に学習を進めていく授業にはなかなか至らなかった。特に、学習したことを振り返って次の学習につなげていくという、児童が自己調整を行いながら学習を進める部分に課題があった。

この課題を解決するためには、児童の自己調整を促すための支援が必要であると考えた。そこで、自己調整を促すために必要な支援を三つの側面で整理する。

一つ目に、児童が自分で目標を設定して学習を進め、自分の学習の状況を振り返り、それを基にして新たな目標の設定を行い、次の学習につなげられるように、単元の構成を工夫することが必要である。中には、自分の力だけでは学習を進めていくことが難しい児童もいることが想定されるため、二つ目に、他者と協働して学べるような学習形態にすることが必要である。他者と協働する中でいつでも相談できるようにしたり、自分の学習状況を見つめ直したりすることで、意欲を持続し、自己調整しやすくなると考える。ただ、学習形態の工夫をしても、児童それぞれの困り感に対する個への対応は必要になると想定される。そこで、三つ目に、粘り強く学習できるように、児童の学習状況に応じて教師が行う支援を充実させることが必要である。児童が学習を進める上で必要な情報を選んで使えるように、教師は学習過程の段階ごとに資料を準備しておき、学習状況に応じて提示する。一人一台端末が配備され、児童がICTを活用して学ぶ環境が整いつつあり、こうした環境

を生かして、教師が意図的に情報の共有をすることも児童の学習状況に応じた支援につながると考える。

本研究では、国語科「書くこと」の指導において、児童の主体的な学びを実現する授業改善を目指す。児童の自己調整を促すための支援を行うことを通して、国語科の学習に興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次の学習につなげながら学ぶ児童を育成できると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

国語科において、児童が主体的に学ぶ授業を実現するために、「児童の自己調整を促すための支援」が有効であることを、実践を通して明らかにする。

III 研究の見通し

国語科において、以下の手立てを取り入れることで、児童が主体的に学ぶ授業を実現できるであろう。

○ 児童の自己調整を促すための支援

1 単位時間ごとに児童が自己の学習の状況を振り返り、次の学習のめあてを設定することを通して、つながりを意識しながら学習できるようにする。そのために、単元の構成を工夫する。また、児童が相談や質問をしたり、自己の学習の状況を確認したりしながら意欲を持続して学べるように、他の児童との協働を促す学習形態の工夫をする。さらに、児童が粘り強く学習できるように、学習状況に応じた支援の充実を図る。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「国語科において、児童の主体的な学びを実現する授業改善」

児童が主体的に学ぶ授業を実現することが、本研究のねらいである。主体的とは、学ぶことに興味や関心をもち、見通しをもって粘り強く取り組むと共に、学習を振り返って次の学習につなげるという、自己の学びを調整する姿である。

主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点(国立教育政策研究所 2020)を基にして、主体的に学ぶ児童の姿と教師の支援を整理した(表1)。

こうした児童の姿が現れる授業に改善するためには、児童の自己調整を促すための支援が必要であると考えた。

表1 主体的に学ぶ児童の姿と教師の支援

児童の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶことに興味や関心をもち。 ・言語活動について相手意識や目的意識をもつ。 ・見通しをもつ。 ・単元の終末に向けて意欲を持続しながら粘り強く取り組む。 ・自己の学習活動を振り返って次時や今後の学習につなげる。 ・自己の学びを捉えることで、自己の成長を実感する。
教師の支援	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を振り返らせる。 ・具体物を提示して引きつける。 ・児童がやってみたいと思う課題を設定する。 ・児童が自らめあてをつかむようにする。 ・学習の見通しをもたせる。 ・児童が自分の考えをもてるようにする。 ・児童の思考を見守る。 ・児童の思考に即して授業展開を考える。 ・児童の考えを生かしてまとめる。 ・その日の学びを振り返る時間を設ける。 ・新たな学びに目を向けさせる。

(2) 「児童の自己調整を促すための支援」

児童が主体的に学ぶことができるように、「単元の構成の工夫」をし、「協働を促す学習形態の工夫」をした上で、「学習状況に応じた支援の充実」を図ることである。

単元の構成の工夫には、自己調整学習を取り入れる。自己調整学習は、「学習者が目標の達成に向けて自らの認知、情動、行動を体系的に方向付けて生起させ維持する過程のこと」と定義されている (Zimmerman & Schunk, 2011)。学習前の予見段階、学習中の遂行段階、学習後の省察段階に分けられる (図 1)。

つまり、児童が目標を自分で決め (予見段階)、目標の達成に向けて粘り強く学習に取り組み (遂行段階)、学習を振り返って次につなげていく (省察段階) 中で自己調整が図られることを示したものである。

遂行段階では、自己の学びを見つめ直せなかったり、学習の進め方でつまずいたりすることで意欲の低下が起こり、最

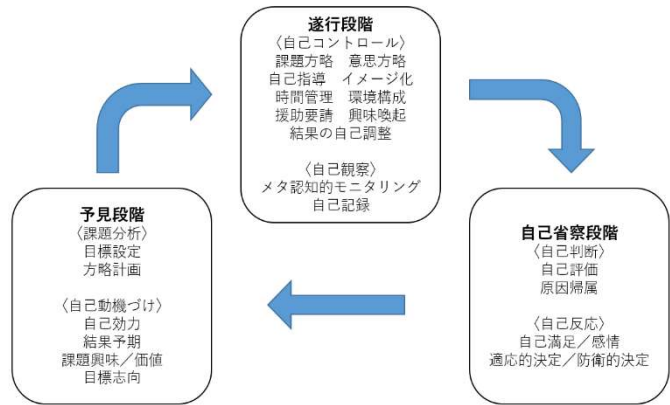


図 1 自己調整学習のサイクルモデル

後まで粘り強く取り組めない児童が出てくるのが想定される。そこで、意欲を持続しながら学習できるように「協働を促す学習形態の工夫」をして、いつでも他者と関わられるようにする。また、粘り強い取組を支えられるように「学習状況に応じた支援の充実」を図る。そうすることで、遂行段階で児童が意欲を持続して粘り強く取り組めるようになり、自己調整のサイクルを回しながら学習しやすくなると考える。

ア 「『書くこと』における単元の構成の工夫」

「書くこと」の学習は、相手や目的を意識した言語活動が学習のゴールとなることが多く、目標に向かって見通しをもち、いくつかのステップを踏みながら自己調整を行うことが求められる。そこで、「単元の導入の段階」「児童が自ら学ぶ段階①」「中間の評価の段階」「児童が自ら学ぶ段階②」「終末の評価の段階」の五つの学習段階を設けて単元の構成を考えた (表 2)。

表 2 単元の構成 (書くこと)

学習の段階	学習過程	目指す児童の姿	主な学習形態
単元の導入の段階	○題材の設定 ○情報の収集 ○内容の検討	○興味や関心をもつ。 ○相手意識と目的意識をもつ。 ○学習の見通しをもつ。	学級全体 個 グループ
児童が自ら学ぶ段階①	○構成の検討 ○考えの形成・記述 ○推敲	○自分が伝えたいことが明確になるように文章の構成を考える。 ○意欲を持続しながら粘り強く学習に取り組む。 ○振り返り基にして次時の計画を立て、つながりを意識しながら学習する。 ○必要に応じてグループで相談しながら学習を進める。 ○グループ内で文章を読み合い、文章を整える。	個 グループ
中間の評価の段階	○推敲	○他のグループとの比較から、自分の文章の課題を見いだす。 ○課題解決のために計画を練り直す。	学級全体 個 グループ
児童が自ら学ぶ段階②	○考えの形成・記述 ○推敲	○計画を基に推敲し、文章を仕上げる。 ○グループで文章を読み合い、確認する。	個 グループ
終末の評価の段階	○共有	○自分の文章の内容や表現のよいところを見付ける。	学級全体 個 グループ

「単元の導入の段階」では、「誰に対して」「何のために」発信したいかという児童の思いから相手と目的を設定し、相手意識や目的意識を明確にもたせることで、学習に向かう

意欲を高められるようにする。また、教師が言語活動のモデルを示し、単元の終末へ向け見通しをもって学習できるようにする。

「児童が自ら学ぶ段階①」では、1 単位時間ごとに自らの学習を振り返って、次時に取り組むべきことを決めながら学習を進めていく。「児童が自ら学ぶ段階①」を複数時間で構成することにより、児童一人一人が目標に向かって、それぞれの歩調で学習を調整しながら粘り強く取り組むことができると考えた。

「中間での評価の段階」では、「児童が自ら学ぶ段階①」で作成してきた文章を互いに読み合い、感想や質問を伝え合う。その際、互いの文章を読んで自分の学習に生かせるものを見付けたり、気付けなかった新たな課題となる部分を明らかにしたりする。教師が、コーディネーターとして児童の学習の様子を意図的に全体で取り上げたり、考えを広げる質問をしたりすることで児童の新たな気付きを促し、学習を深められるようにする。

「児童が自ら学ぶ段階②」では、「中間の評価の段階」を経て、再検討したことを基にして推敲し、成果物を仕上げる活動を行う。

「終末の評価の段階」では、学級全体で成果物を共有する。そこで、互いの作り上げた文章のよさを認め合う。「できた」という実感を伴った自己の成長を感じられるようにすることで、主体的に学ぶ力を高めることができると考えた。

このように、本研究では、児童が見通しをもって取り組めるようにする。そして、自己の取組を振り返り、次のステップに向かって見通しをもつ。こうした形で、自己調整のサイクルが単元の構成に組み込まれている。「中間の評価の段階」で互いに感想や質問を伝え合う機会をつくることにより、自己調整のサイクルを二度回せるようになると考えた。

イ 「協働を促す学習形態の工夫」

全ての児童が自分の力で学習課題を解決するためには、単元を通して意欲を持続して学習できるようにする必要がある。児童の中には、自己の学習状況を客観的に捉えることが難しい児童もいる。そこで、いつでも他者に相談したり、確認したりできるような環境を構成する。グループ内対話で言語化することを通して考えを整理し、自己の学習状況を客観的に捉えられるようにする。また、児童一人一人が文章を作成するが、グループのメンバーを協働学習者とし、いつでも他者に相談しながら取り組めるようにすることで、意欲を持続しながら学習できるようにする。さらに、グループで互いの文章を読み合ったり、進捗状況を伝え合ったりする活動を毎時間設定することで、自分では気付けなかった修正点や次時の学習で取り組むべき課題を明らかにし、自己調整のサイクルを回しながら学習しやすくなると考えた。

ウ 「学習状況に応じた支援の充実」

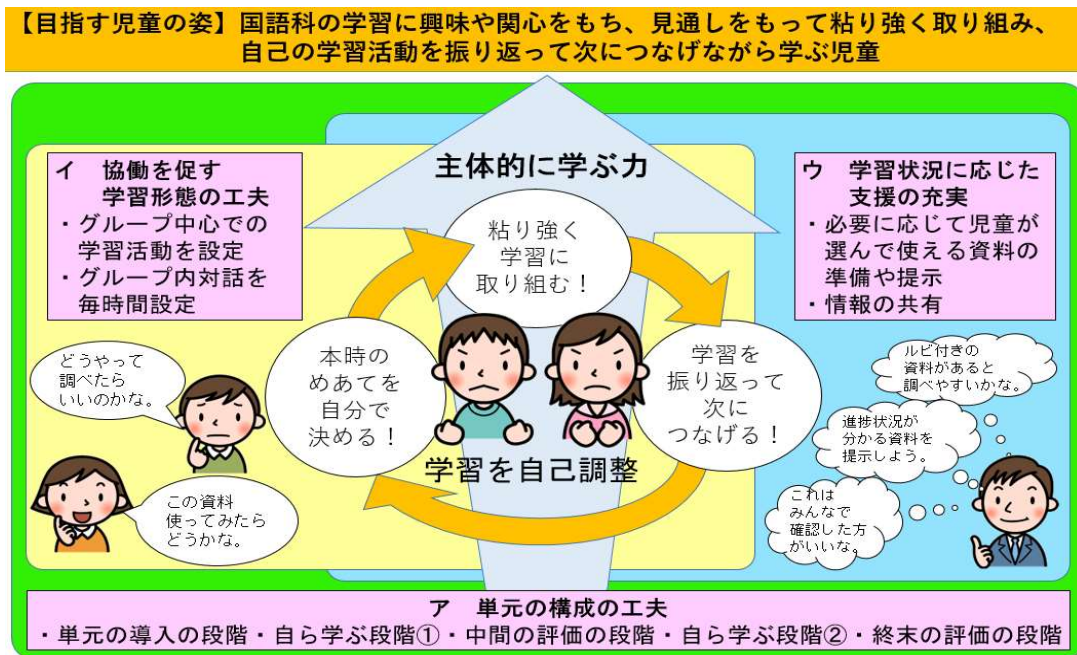
児童の粘り強い学習への取組を支えられるように、児童を観察して見取ったことを基に、学習状況に応じて教師が支援を行う必要がある。必要な支援は主に二つである。

一つ目は、資料の準備や提示である。「書くこと」では、文章を書く材料を集める必要がある。これまで児童が資料を使って調べる際には、必要な情報につながるまでに時間がかかっていた。そこで、児童が必要な情報にすぐにつながれるように複数の資料の準備をする。本や百科事典など、児童が手に取って調べることができる資料は無論のこと、指導者用端末で必要な情報が載っている Web サイトの URL のリンク集を作成しておき、学習者用端末に配付しておく。未習の漢字が読めないことも想定されることから、必要に応じて

ルビ付きの資料（紙面）も準備する。これらの資料を児童が選んで使えるようにすることで、効率的に調べることができるようになると思う。また、児童の学習状況を見取り、必要に応じて資料を提示することも重要である。児童自身の力で学習していくためには、学習課題の解決に向けた道標が必要である。言語活動のモデルとなる参考資料、学習の進捗状況が分かる一覧、学習を進めるに当たって留意する点等が示された資料を提示する。また、そうした資料は、学習者用端末に配付しておき、児童が必要に応じて確認しながら学習できるようにする。さらに、より踏み込んだ支援が必要な児童には補助資料も配付する。これらの支援を行うことで、児童が迷いなく学習を進めることができると考えた。

二つ目は、情報の共有である。手本となる児童の取組を称賛し、モデルとして示す。また、児童の困り事を意図的に全体で取り上げ、教師からの問い返しや問い直しを通してみんなで解決策を考えるなど、情報を共有しながら学習を進めていく。こうした教師の言葉をきっかけにして、児童が自分の作品のよさや修正点に気付き、自己調整しながら学ぶことにつながると考えた。また、指導者用端末に困っていることを送信するように声をかけ、それに返信することで、端末を通して支援することもできると考えた。

2 研究構想図



手立 て 児 童 の 自 己 調 整 を 促 す た め の 支 援

V 実践の概要

1 実践計画

(1) 実践の対象

勤務校の第4学年3学級104名を対象として実践した。

(2) 単元(教材)名

中心となる語や文を見つけて要約し、調べたことを書こう(伝統工芸のよさを伝えよう)

(3) 実践期間

令和3年10月11日(月)～26日(火)(9時間×3クラス=全27時間)

2 検証計画

「児童の自己調整を促すための支援」の成果を次の方法で検証する。

手立て	検証の視点	検証の方法
ア 単元の構成の工夫	○見通しをもって学習することができていたか。 ○振り返りを基にして次時の計画を立て、つながりを意識しながら学習できていたか。	○事前・事後アンケート ○学習計画シート(振り返りと計画)
イ 協働を促す学習形態の工夫	○児童が相談や質問をしたり、学習状況を確認したりして意欲を持続してあきらめずに学習できていたか。	○事後アンケート ○授業記録(ビデオ)・児童観察
ウ 学習状況に応じた支援の充実	○児童が粘り強く文章を書くことができていたか。 ・教師の支援を参考にしながら学習課題の解決に向けて取り組んでいる。 ・自分が選んだ伝統工芸の魅力を伝えるリーフレットを作ることができる。	○事後アンケート ○授業記録(ビデオ)・児童観察 ○学習の成果物(リーフレット)

3 実践

(1) 実践の概要

授業の実践は、「伝統工芸のよさを伝えよう」において、リーフレットを作る学習で行った。児童が主体的にリーフレット作りに取り組めるように、手立てとして「児童の自己調整を促すための支援」を「単元の構成の工夫」「協働を促す学習形態の工夫」「学習状況に応じた支援の充実」の三つの側面から行った。

○ 手立て 「児童の自己調整を促すための支援」

ア 単元の構成の工夫

「単元の導入の段階」「児童が自ら学ぶ段階①」「中間の評価の段階」「児童が自ら学ぶ段階②」「終末の評価の段階」の五つの段階で単元を構成し、指導を行った。自己調整しながら学びをつなげていけるように、学習計画シートを用いて自己の学習状況の振り返りを基にして、次の時間のめあてを設定する活動を毎時間行った(図2)。

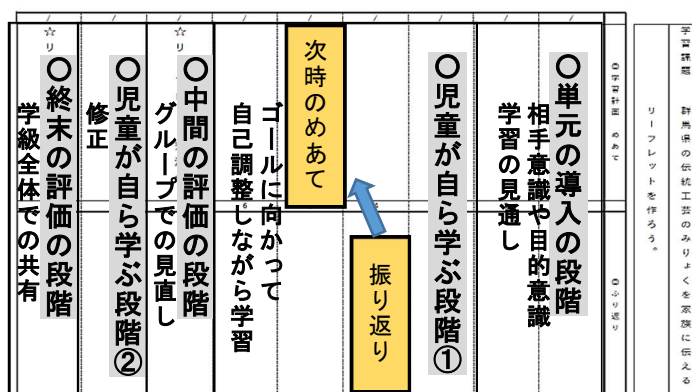


図2 学習計画シート

「単元の導入の段階」は、児童の興味・関心を引き出し、単元の終末に向かって見通しをもつ上で非常に重要な段階である。まず、児童の学びに向かう意欲を高めるために、実際に様々な施設等で配付されているリーフレットを示したり、群馬県が指定している伝統工芸について紹介したりした。次に、伝える相手は、児童の思いから家族に伝えることに決定した。このような児童とのやり取りを経て、「群馬県の伝統工芸の魅力を家族に伝えるリーフレットを作ろう」という学習課題を設定し、相手意識と目的意識が明確にもてるようにした。さらに、リーフレットを作るに当たって、単元の終末に向けて見通しをもてるように、教師がモデルを示してリーフレットに載せる情報を確認した。

「児童が自ら学ぶ段階①」では、群馬県の伝統工芸の魅力を家族に伝えるために、「構成の検討」「考えの形成」「記述」「推敲」という学習過程を、複数時間で構成することにより、学習の進捗状況に応じて児童が自身で計画を立てて学習できるようにした。何を学び、何が不十分だったのか、次時に何をしなければならないのかなど、毎時間振り返ったことから次時のめあてを設定することを通して学習のつながりを意識し、自己調整のサイクルを回せるようにした。

「中間の評価の段階」で行うことは他者の目による推敲である。児童が、自己の学習の

状況を客観的に見つめ直すのは容易ではない。従って、他者の目による確認が必要であり、学習が煮詰まってきた段階で、意図的に互いの成果物を読み合う機会を設けた。こうすることで、よりよいリーフレットにするために、次の計画の練り直しを行えるようにした。

「児童が自ら学ぶ段階②」では、「中間の評価の段階」での交流を基にして、よりよいリーフレットにするために修正を行い、二度目の自己調整のサイクルを回せるようにした。(図3)。



図3 中間の評価を経て修正する児童

「終末の評価の段階」では、学級内で交流を行った。書き手の家族になったつもりで互いに読み合い、感想を交流するようにした(図4)。単元のまとめということもあり、本単元の学習を通して身に付けた国語の力を確認すると共に、児童のこれまでの取組を称賛し、一人一人の学ぶ姿に対して価値付けを行った。



図4 終末の評価で交流する児童

このように、自己調整のサイクルを二度回せるように単元の構成を工夫することで、児童が学習したことを次につなげる意識をもてるようにした。

イ 協働を促す学習形態の工夫

自己の学習状況を客観的に見つめ直すことが難しい児童や、自身の力のみでリーフレットを作ることに不安を抱く児童がいることを想定し、グループで協働して学習することとした。困ったときにいつでも相談できるという安心感をもって学習できるようにするためである。そこで、グループを「会社」と設定し、児童が楽しみながら意欲を持続して学習できるようにすると共に、協働での学習に必要な感をもてるようにすることをねらいとした。

「会社」内で「個人の本時のめあての宣言」「学習の遂行・相談」「会社内での学習報告」を行い、そこで言語化したことを基にして「本時の振り返りと次時のめあての設定」をすることを一連の学習の流れとした。協働で学習することを通して、自己の学びを振り返り、次の学習につなげていくことを毎時間行うことにより、自己調整のサイクルを回しながら学習しやすくした(図5)。



図5 「会社」での学習の様子

ウ 学習状況に応じた支援の充実

「単元の導入の段階」では、児童が粘り強く学ぶ原動力となる興味・関心を高めるために、群馬県の伝統工芸についてまとめられている「パンフレット」を群馬県産業経済部地域企業支援課より取り寄せ、全児童に配付して自由に見られるようにした(図6)。また、どのように調べれば



図6 パンフレット(左)
Webサイトのリンク集(右)

よいか分からない児童がいることを想定して、群馬県に指定された全ての伝統工芸について調べられるように、タップするだけで「Web サイトにつながるリンク集」を学習者用端末に送付した（前頁図6）。気に入った伝統工芸については、リーディングリストに保存することで、すぐにそのサイトにつなげられるようにした（図7）。これらの支援を通して、群馬県の伝統工芸について知る時間を十分に取り、家族に伝えたいものを自由に選べるようにした。また、教師が作成した文章と写真を組み合わせてリーフレットを作る体験（図8）を行うことを通して、学習のゴールの姿を想像できるようにした。



図7 リーディングリストへの保存



図8 リーフレットを作る体験

「児童が自ら学ぶ段階①」では、見通しをもって学習を進められるように「リーフレット完成までの道」を示し、学習者用端末に送付しておくことで、各自で進捗状況を確認しながら学習できるようにした。児童によって学習の進捗状況が異なるため、児童観察や学習計画シートの児童の記述から困り感を見取り、「要約の仕方」や「組み立ての例」、文章を読み直すための視点である「チェックリスト」を示し、端末を活用して学習の状況に応じた支援を行った（図9）。また、手を止めている児童に声をかけて一緒に考えたり、要約した文章と写真を組み合わせている児童の取組を取り上げて紹介したりした。さらに、協働で学習するよさを生かせるように、「会社」内で相談することを促すなどの意図的な働きかけも行った。

<p>リーフレット完成までの道 レベル① 調べ みりよく見つけ 言葉、文探し 要約 出典 写真</p>	<p>レベル② 組み立て 題名、初め、中、終わりに何を 書くか決める。</p>	<p>☆こころ事 ・くり返し出ている言葉や、まじり りの中心となる文 ・全体のまとめや、問いに対する答 えの部分を中心にまとめる</p> <p>①説明する文や意見文を要約 する時、おさえ、くり返し出てる 言葉や、まじりの中心となる文 に気をつけてまとめる。 ・全体のまとめや、問いに対する答 えの部分を中心にまとめる</p>
<p>レベル③ 文章を書く。キーボードを使 って書く。</p>	<p>チェックリスト ○自分が伝えたいみりよくが書けて いますか。 ○家族にみりよくが伝わるように書 けていますか。 ○まちがえている字はないですか。 ○段落など、書くことの約束は守れ ていますか。 ○写真は、自分が書いた文章と関係 のあるものになっていますか。 ○出典を書くことができていま すか。</p>	<p>■組み立ての例 博多おりに、は、まじりよくがある。 みりよく「使やすさ」について ・ゆきみによく、はとやうい（写真①） ・動物の形に似られる。（写真②） ・ふしが力を産すときの帯にした。 みりよく「楽しさ」について ・先にもうを決め、糸をまとめてから おろす。（写真③） ・細かいみりよくもよう。（写真④）</p>

図9 学習状況に応じた教師の支援

「中間の評価の段階」では、学習者用端末で組み立てシートやリーフレットの下書きを写真に撮っておくように指示し、ムーブノートの広場を使って「会社」内で共有できるようにした。文章の内容的な修正については児童が互いに助言しにくいことも考え、気付きを促せるように、教師が児童一人一人の文章に対して付箋にコメントを書いて渡した。

「児童が自ら学ぶ段階②」では、十分に交流せず、自分の考えだけでリーフレット作りを進める児童もいた。そこで、交流を生かせるように、中間の評価で友達の助言を生かすことができているか、チェックリストを確認して読み直してみたかなど、必要に応じて児童に声をかけた。

「終末の評価の段階」では、ムーブノートを活用し、端末上で互いの完成したリーフレットを読み合えるようにした（図10）。



図10 学習状況の共有

(2) 結果と考察

ア 手立てア 単元の構成の工夫

「見通しをもって学習することができていたか」「振り返りを基にして次時の計画を立て、つながりを意識しながら学習できていたか」を検証するために、(ア)事前・事後アンケートの結果と(イ)学習計画シートの2点から単元の構成の工夫の有効性を述べる。

(ア) 事前・事後アンケートの結果

表3は単元の構成の工夫に関わる事前・事後アンケートの結果である。質問項目aを見ると、実践前よりも実践後の方が自分で計画を立てて学習しているという割合が減っている。しかし、事後アンケートの追加項目で、「本実践においてはどうか」という視点で聞いたところ、97%の児童が振り返りを基にして次のめあてを考えたと回答している。また、95%の児童が自分の文章を読み直し、より魅力が伝わるようにしたと回答している。事後の二つの結果を見ると、本実践においては、児童が振り返りを基に自らめあてを決め、めあてを達成するために粘り強く取り組むという自己調整する姿が表れていたと考えることができる。事前・事後アンケートの結果の変化は、児童が本実践を通して、自分で計画を立てるといことや計画表を確認しながら学習することの理解が深まったことが要因として考えられる。

表3 単元の構想の工夫に関わる事前・事後アンケートの結果 (%)

質問項目		あてはまる	どちらかといえばあてはまる
a 国語の授業で文章を書くとき、自分で計画を立てたり、その計画表を見たりしながら学習に取り組んでいるか。	事前	40	46
	事後	33	49
b 「伝統工芸のよさをつたえよう」の学習のとき、前の時間の振り返りを基にして、次の時間のめあてを考えたか。	事後	76	21
c 「伝統工芸のよさをつたえよう」の学習のとき、自分の文章を読み直し、より魅力が伝わるようにしたか。	事後	70	25

(イ) 学習計画シート

E児(表4)、F児(表5)、G児(表6)の学習計画シート(第3時から第6時)の記述である。

表4 E児の学習計画シート

3	めあて：自分の選んだ伝統工芸について調べよう。 振り返り：①タブレットを使って作り方を調べた。次はもっとよさの理由を調べたい。
4	めあて：調べる続き。時間があったら要約をしよう。 振り返り：②明日は組み立てをして、月曜にはタブレットに打てるようにしたいです。調べることは終わったので要約したいと思います。今日は調べ学習をやると決めてめあて通りできました。
5	めあて：組み立てをしよう。 振り返り：③「会社」でやり方がわからなかったときに教えてくれたり、話し合ったりして要約を上手にできました。明日の国語の時間は、「参考」を書いて打ち始めたいです。
6	めあて：組み立ての続き。できればレベル3(文章をタイピングで打つこと)をしよう。 振り返り：レベル3の「題名」「初め」が打てました。次は、「中」「終わり」「参考」を打ちたいと思います。

E児は、毎時間、振り返りを基にして次時のめあてを設定している。①の記述から、自分が選んだ伝統工芸について調べようと考えていたが、活動が不十分であったと感じていたことが分かる。そのため、次時のめあてに「調べる続き」という言葉を記している。さらに、ただ何となく調べるのではなく、「(伝統工芸の)よさの理由」を調べたいと自己の学びを次時につなげようとしている。②の記述から自己の学びを見つめ直し、見通しをもって学習していたことも伺える。③の記述からは、困った時に「会社」の仲間と相談しながら学習していたことも分かる。これらの記述から、E児は、振り返りから次時のめあてを設定する中で見通しをもち、つながりを意識しながら学習できていたと考えることができる。

表5 F児の学習計画シート

3	めあて : ④伝えたい伝統工芸を調べる。 振り返り : みりよくや文などが書けましたが、要約がまだ終わっていないので、次回要約を終わらせます。
4	めあて : ⑤リーフレット作りの続きを進めよう。 振り返り : 今日はタブレットの検索サイトを使って桐箱の大事なところを要約できました。
5	めあて : ⑥要約して組み立てまでやります。 振り返り : 今日は写真をとりました。いろいろな桐箱の形、種類などがとれました。文と写真が合うようにしたいです。
6	めあて : ⑦キーボードで打って文章を書きます。 振り返り : 進み具合はじゅんちょうなので、いろいろ参考にして、いい文章にしたいです。

F児の記述からは、めあてと学習の振り返りのつながりが見えづらい部分はあるものの、自分が今日できたことや次の時間に何をするかについて、振り返りに書くことができている。また、F児は④⑤のように、教師が例示しためあてを学習計画シートに書いていたが、⑥⑦では自分の言葉でめあてを設定しており、次時の見通しを具体的にもつことができている。学習を進める中で、具体的に何をすればよいのかを徐々に意識できるようになってきたと考えられる。こうした姿から、本時に学習したことを次の学習につなげていこうという意識が高まってきたことが分かる。よって、F児も次時の見通しをもって、つながりを意識しながら学習していたと考えることができる。

表6 G児の学習計画シート

3	めあて : 伝えたい伝統工芸を調べよう。 振り返り : ⑧だるまの色や大きさを調べられました。次はもっとたくさん人と話したりしてたくさん書きたいです。
4	めあて : リーフレット作りの続きを進めよう。 振り返り : 今日はメモを完成させたいと決めて、⑨先生にかしてもらった紙を使ってメモを作りました。
5	めあて : みりよくを伝えるリーフレット作りの続きをしよう。 振り返り : リーフレットの続きができました。⑩むずかしい漢字があったので、かんじじてんをもってきます。
6	めあて : キーボードを打とう 振り返り : キーボードで中のと申しかうてなかったののでいそいでかんせいさせたいです。

G児は、自分の力でめあてを設定することが難しく、教師が黒板に例示したものをめあてとして書いている。しかし、振り返りの内容を見てみると、⑧のように自分ができたことを記述し、学習状況を見つめ直している。また、友達のを借りながら学習を進めていこうと考えていたことも分かる。調べ学習を行う際は、⑨で記しているように、教師が用意したルビ付き資料を使って自分の力で解決しようとする姿が見られた。自分の力で解決する方法があることに気付いたG児は、⑩のように漢字辞典を使って調べればできそうだと自分で解決の見通しをもつことができた。これらのことから、G児についても、次時の見通しをもって、つながりを意識しながら学習していたと考えることができる。

アンケートの結果と学習計画シートの記述には、児童がめあてを自分で決め、見通しをもって学習し、振り返りを基にして次時のめあてを設定する中でつながりを意識しながら学習する姿が表れていた。よって、単元の構成の工夫は有効であったと考える。

イ 手立てイ 協働を促す学習形態の工夫

「児童が相談や質問をしたり、学習状況を確認したりして意欲を持続してあきらめずに学習できていたか」を検証するために、(ア)事後アンケートの結果と(イ)児童観察・授業記録の2点から協働を促す学習形態の工夫の有効性を述べる。

(ア) 事後アンケートの結果

次頁表7は、協働を促す学習形態の工夫に関わる事後アンケートの結果である。「分からないことを先生や友達に聞いた」と回答した児童は97%、「先生や友達のアドバイスや友達のよさを自分のリーフレット作りに取り入れた」と回答した児童は94%であった。このように児童が回答したのは、本実践において、「会社」という学習形態で協働しながら学習を進め、困ったときに相談をしたり、質問をしたりするよさを実感できたためであると考

えられる。あきらめずに最後まで取り組むためには、意欲の持続が必要である。「あきらめずにがんばることができた理由」として、『会社』の友達と協力できたこと」を挙げている児童の割合が30%と最も高かった。この結果から、友達とすぐに相談したり、確認したりしたことが意欲を持続しながら取り組むことに効果があったと考えることができる。

表7 協働を促す学習形態の工夫に関わる事後アンケートの結果(%)

質問項目		あてはまる	どちらかといえばあてはまる
d「伝統工芸のよさをつたえよう」の学習のとき、分からないことを先生や「会社」の友達に質問したか。	事後	78	19
e「伝統工芸のよさをつたえよう」の学習のとき、先生や友達からのアドバイスや友達のよさをリーフレット作りに取り入れたか。	事後	72	22

あきらめずにがんばることができた主な理由(%)	
○振り返りながら考えてリーフレットを作ったから	8
○家族に魅力を伝えたいから	27
○「会社」の友達と協力できたから	30
○教師の支援があったから	23
○その他	12

(イ) 児童観察・授業記録(ビデオ)

児童が選んだ伝統工芸について調べる際に使ったのは、百科事典、パンフレット、Webサイト、教師が準備したルビ付き資料である。何を使って調べるかは児童自身が選択し、必要な資料を選んで調べていた。「会社」による学習を基本としたことにより、調べ方や文章の書き方が分からないときに、互いに助言し合う姿が見られた。表8は、第5時にある「会社」内で実際に行われた児童がやり取りをしている様子である。

表8 「会社」内での児童のやり取りの様子

<p>(伝統工芸の説明を考える場面)</p> <p>A児：これって、要約したの？ (だるまの説明を書いている友達の様子を見て)</p> <p>A児：①えっ。そういう風に書くの？ 私は、こういう風に書いた。(互いに見せ合う)消そう。</p> <p>B児：ちょっと待って。なにになになに。</p> <p>A児：②私はこう書いたけど。「こけしは群馬県の伝統工芸です。こけしを作るのに…」</p> <p>B児：説明になっているよ。こけしの。だからいいんだよ。</p> <p>A児：③ああそっか。ありがとう。</p> <p>(写真を選ぶ場面)</p> <p>A児：えっと。どうやったら写真の保存ができるの？</p> <p>C児：どれがいいの？</p> <p>A児：じゃあ、ええと。これかな。ありがとう。</p> <p>C児：レベル2終わったから読み合いっこしよう。</p> <p>A児：④待って。写真なんだけど、この文にあったやつを選ばなくちゃいけなかったから、もう一回選び直そう。一緒に選び直そうよ。</p> <p>C児：わたし、ううん。そうだね。</p> <p>A児：⑤そうじゃないと報告できないよ。</p> <p>(学習報告後)</p> <p>C児：題名なんだけど、聞いててね。いくよ。群馬県の伝統工芸のこけし。でもオリジナル感出した方がいいよね。</p> <p>A児：⑥そっか。うん。私、題名変える。</p>
--

ここでは、会話の内容から自己調整している様子が分かるA児の学習の様子に焦点を当ててみる。A児は、①②のように「会社」の中で自分の学習の進め方でよいのか確認している。自分の書き表し方が「違うから消す」のではなく、友達のお墨付きをもらうことで、③のように自信をもつことができ、安心していることが分かる。写真を選ぶ場面では、④のように選んだ写真と書いた文章がつながっているかという視点で見つめ直し、写真を選び直すという選択をしている。また、⑤の「報告できないよ」という言葉からは、本時に自分がやると決めたことを「会社」内で報告できないと考えたことが分かる。学習報告後のC児とのやり取りの中では、リーフレットの題名に課題を感じ、よりよいものに変えようと自己調整する姿も見られた。こうした「会社」での対話を通して、自己の学びを自覚する姿が見られた。A児は第5時以降もこうしたやり取りを繰り返し、図10(次頁)のようなリーフレットを作成することができた。

参考 こけしって何？語源 や歴史を簡単に解説	画 像 このように、こけしは とても魅力のあるものな のです。わたしは、おも しろいこけしをたくさん の人に知ってもらいたい と思っています。	② (写 真) 一つ目は、おもしろさ です。首をまわすとおも しろい音が鳴るこけし や、おかつばのこけし (写真②) 顔からほにか けて赤い花びらが描かれ ているこけしなどいろい ろあります。	画 像 一つ目は、おもしろさ です。首をまわすとおも しろい音が鳴るこけし や、おかつばのこけし (写真②) 顔からほにか けて赤い花びらが描かれ ているこけしなどいろい ろあります。	① (写 真) 一つ目は、おもしろさ です。首をまわすとおも しろい音が鳴るこけし や、おかつばのこけし (写真②) 顔からほにか けて赤い花びらが描かれ ているこけしなどいろい ろあります。	画 像 こけしは、群馬県 の伝統工芸品です。 こけしはたくさん の人に愛されてきまし た。そんなこけしの 魅力を二つ紹介しま す。	あいされているこけし
------------------------------	--	---	---	---	---	------------

図 10 A児が作成したリーフレット

「中間の評価の段階」では、「会社」内で推敲を行った。ムーブノートの広場を活用して共有した互いのリーフレットや下書きについて、読んだ感想や書いてある内容についての助言を付箋に書いて交流した(図 11)。付箋に書かれた内容を見ると、互いの文章をよりよいものにしようという視点で交流し、



図 11 付箋に書いて交流

新たな課題を明らかにすることができたことが伺えた。しかしながら、この場面では他者の文章に対する児童間の推敲が十分に行われたとは言えない状況もあった。要因としては、「児童が自ら学ぶ段階①」における「会社」での交流の際、口頭でのやり取りを続けてきたために、文章の内容を互いに理解していて、表現に対する修正点を見付けにくい状況であったことが考えられる。また、推敲する時間よりも自身のリーフレット作りを進めたいという思いの方が強かったことも考えられる。実際に交流を終えた児童の多くは、自身のリーフレット作りを進めている様子が見られた。こうした児童の思考自体は自己調整しているとも言えるが、教師が意図した「他者からの質問によって自己の学習を見つめ直し、修正すること」にはつながらなかった。このことから、「中間評価の段階」では、相互評価を行うタイミングや交流する目的と視点を明確にしていくと共に、教師の関わり方を再考する必要がある。

「終末の評価の段階」のリーフレット発表会では、端末にリーフレットを提示して積極的に交流をしていた。伝える相手が家族であることから、書き手の家族になったつもりで読み、感想や質問を伝えるように目的と視点を明示したところ、交流の最中に修正を始める児童の姿があった(図 12)。これまで作品を見合っていなかった友達からの感想や質問により、リーフレットの修正点に気付いたため、修正することへ意識が移ったと考えられる。交流後、多くの児童から「もう1時間修正する時間が欲しい」という声上がり、意欲を持続しながらあきらめずに学習してきたことが伺えた。



図 12 文章を修正する児童

事後のアンケートの結果や「会社」で対話する様子には、協働で学習する中で相談や質問をしたり、学習状況を確認したりして、意欲を持続しながらあきらめずに学習する姿が現れていた。よって、協働を促す学習形態の工夫は有効であったと考える。

ウ 手立てウ 学習状況に応じた支援の充実

「児童が粘り強く文章を書くことができていたか」を検証するために、(ア)事後アンケー

トの結果と(イ)授業記録と(ウ)学習成果物（リーフレット）の文章の3点から手立てウの有効性を述べる。

(7) 事後アンケートの結果

表9の事後アンケートの結果から、実践における教師の支援を参考にした児童の割合は96%、実践した単元において、「最後まであきらめずにがんばることができた」と回答する児童の割合も97%と高かった。

表9 学習状況に応じた支援の充実に関する事前・事後アンケートの結果（%）

質問項目		あてはまる	どちらかといえばあてはまる
f「伝統工芸のよさをつたえよう」の学習のとき、先生から学習者用端末に送られたもの（調べたいページのリンク、組み立て例、チェックリスト）を参考にしたか。	事後	69	27
g「伝統工芸のよさをつたえよう」の学習のとき、最後まであきらめずにがんばることができたか。	事後	86	11

どのような教師の支援が役立っているか自由記述形式で尋ねたところ、表10のような回答が得られた。教師が指導者用端末を活用して資料の準備や提示、意図的に教師が取り上げて情報の共有をしたことで、「学習の進め方が分かるようになる」「参考になる」「学習していることの意味が分かる」「大きく見やすくなる」「友達の文章が見られる」「自分の文章を教師に送ることで助言をもらえる」と児童は感じていることが分かる。表7（p.40）の結果も合わせると、学習状況に応じて教師が支援を行ったことが、児童の粘り強く取り組むことに効果があったと考えることができる。

表10 端末に送付して行った教師の支援に対する児童のコメント

○やり方や書き方が分かるし、他の人の画面もテレビに映せるから、友達がやっていることも分かる。
○参考になったり、やっていることの意味が分かるようになったりする。
○文字が見えやすくなったことが役に立っている。
○友達の文章がすぐに見られたり、自分の文章を先生に送れたりすることでアドバイスをもらえることが役立っている。

ICTによる支援は、画面が切り替わると消えてしまい、児童の手元に残らないものもある。本実践では、学習者用端末上でいつでも確認できるようにしたことで、学習の進め方について理解が深まり、自己の学びの価値を実感させることができた。また、端末を使って友達の文章を参考にしたり、教師に助言をもらったりして、他者とつながることのできるよさも実感させることができた。

(イ) 授業記録（ビデオ）

リーフレットで魅力を紹介する伝統工芸についてインターネットを使って調べる際には、教師が学習者用端末に送ったリンク集を活用していた。Webサイトのリンク集を送付しておいたことにより、児童が迷いなく調べることができていた（図13）。また、端末のリーディングリストに知りたい情報が載っているWebページを登録するようにしたことで、使いたい資料をすぐに見付けることができた。児童一人一人に教師が端末を活用して支援を行ったことが、調べることにかかる時間を短縮し、効率的に学習を進めていくことにつながったと考える。

児童の学習の進み具合に応じた資料を準備したことにより、児童が自分のタイミングでその資料を取り出して活用していた。組み立てを考える際に、教師が送付した資料を見ながら取り組む姿も見られた（図14）。また、端末で資料を見返し



図13 資料を使って調べる児童



図14 資料を参考にする児童

たり、確認したりしながら文章の内容を検討している児童もいた。これらのことから、教師が端末を活用して支援をしたことが、児童が粘り強く文章を書くことに効果的に働いたと考えることができる。

ただ、国語科の指導事項の定着には課題が残った。研究の構想の段階では、一人一人の端末とつながり、端末上で支援を行うことも想定していた。しかし、実践では、教師が児童の端末操作の支援に時間を使うことが多く、文章の構成や内容など、指導事項の活用について十分な支援をすることが難しかった。教科として指導すべきことについて、学習状況に応じた支援の質を高めていくことは今後の課題である。

(ウ) 学習成果物（リーフレット）

図 15 は、E 児が作成したリーフレットである。E 児は、「桐生蓑虫工芸」という伝統工芸を選んだ。

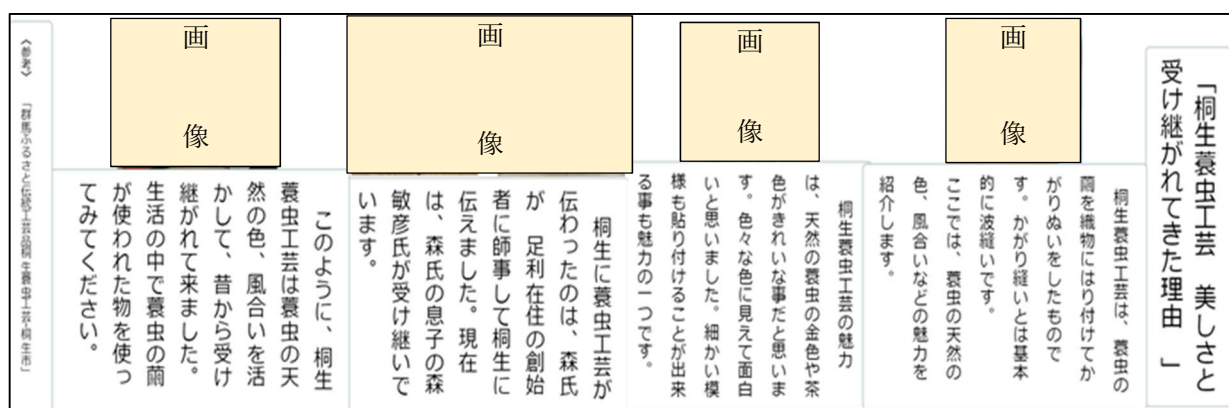


図 15 E 児が作成したリーフレット

リーフレットの初めには、蓑虫工芸品の説明や色、風合いが魅力であると書いている。写真を見てみると、文章とつながっていないものもあるが、美しい色や風合いが伝わるものを選んでる。終わりの部分には、紹介する一文を入れていることから、相手意識をもつことができているものと考えられる。E 児は、最後まで自分の力でリーフレットを仕上げることができたが、教師が示した「リーフレット完成までの道」、「組み立ての例」を学習者用端末で確認しながらリーフレット作りを進めていた。このことから、学習者用端末でいつでも資料を確認できるようにしたことが効果的に働いたと考えることができる。

図 16 は、F 児が作成したリーフレットである。F 児は、「伊勢崎桐箱」という伝統工芸を選んだ。

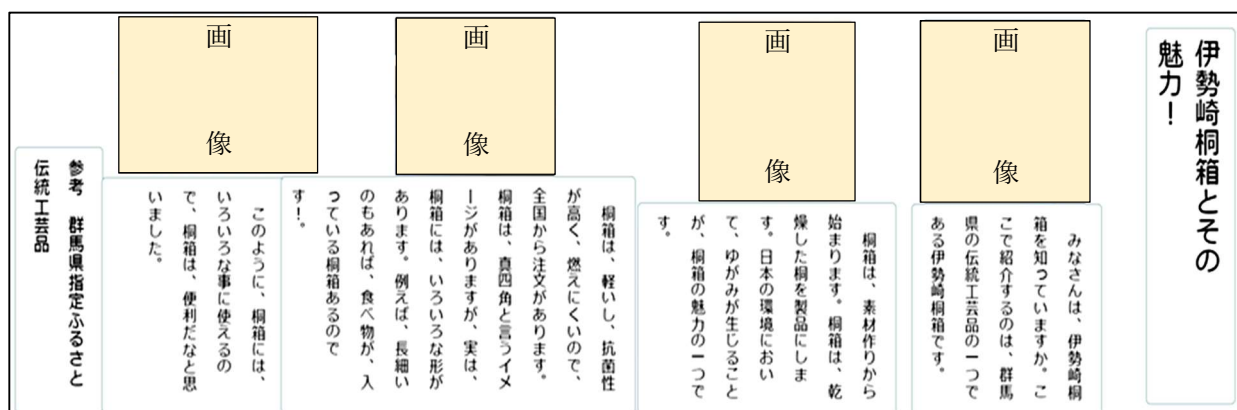


図 16 F 児が作成したリーフレット

初めの部分に読み手を意識して呼び掛ける一文を入れ、紹介する伝統工芸の特徴について書いている。中の部分では、「軽しい、抗菌性が高く、燃えにくい」という特徴が魅力であることや使用例についても書いている。写真と文章のつながりについては、「ゆがみ」ということから蓋の閉まっていないものを選んだり、様々な特徴の桐箱を選んだりしている。このことから、伝えたい魅力を表現するために、「チェックリスト」で示した「写真と文章のつながり」を考えていたことが分かる。一方、初めの部分では読み手を意識することができていたが、終わりの部分では自分の感想を述べるのに留まっており、家族に紹介するという意識が薄れてしまったと考えられる。実際の読み手を意識して読み合うためのヒントを示すなどして、互いの表現を見直すことができるように支援していく必要がある。

図 17 は G 児が作成したリーフレットである。G 児は、「高崎だるま」という伝統工芸を選んだ。

画 像		画 像		高崎だるま 群馬県の高崎だるまの色や顔の意味を表すみりよくを二つ紹介します。
(伝統工芸品 高崎だるま) 高崎だるまの色や顔の意味のみりよく (参考) 高崎だるまの色や顔の意味のみりよく	このように、高崎だるまは、色や顔のさまざま特徴があります。他にもいろいろな形もあります。だるまと言っは、お守りのように、みんなの願いごとをかなえてくれる縁起物です。	二つ目は、描かれている顔は鶴や亀をあらわしています。なぜ鶴と亀かと言つと鶴は千年亀は万年のことわざがあるからです。それは、鶴と亀はとても長生きだからです。	一つ目は、赤、青、黄色などの、十色のえんぎだるまがあり、くぼんだ赤色のどつたいに白い顔がついています。他にも不思議なレインボウだるまは、自分の生きるためのお守りとして誕生しました。	

図 17 G 児が作成したリーフレット

G 児は、未習の漢字を読むことが難しく、資料から魅力を伝える語や文を見付けることに困り感を抱えていた。教師がルビ付き資料を準備したことにより、それを確認しながら魅力を伝える語や文を見付けて文章に書く材料を集めることができた。リーフレットには、初めの部分に伝えたい魅力として「だるまの色や顔の意味」と書いている。それを受けて、中の部分には色や顔の特徴が表す意味について書いている。終わりの部分では、「だるまと言うのは、お守りのように、みんなの願い事をかなえてくれる縁起物です。」と結んでいる。教師の支援をきっかけにして書く材料を集められたことが、だるまのことを伝えたいという G 児の思いの詰まった文章を書くことにつながったと考えることができる。

本実践では、指導者用端末を使って教師が行った支援を、児童が学習状況に応じて活用していた。また、学習者用端末を使って言語活動を行ったことにより、修正や推敲が容易になり、児童の負担感を減らすことができたと考える。加えて、文字を書くことが苦手な児童にとっては、誰でも読める文字で作成できるため、文章の作成に力を注ぐこともできたと考える。こうした支援を通して、全ての児童がリーフレットを作ることができた。これらのことから、児童が粘り強く文章を書くために、学習状況に応じた支援の充実は有効であったと考える。

以上のことから、本研究で三つの側面から、児童の自己調整を促すための支援を行ったことは、児童が主体的に学ぶ授業を実現するために有効であったと考える。

VI 研究のまとめ

1 研究の成果

本研究では、国語科において、児童が主体的に学ぶ授業を実現するために、「児童の自己調整を促すための支援」という手立てを講じた。「単元の構成の工夫」を通して、振り返ったことを次時の学習につなげることを繰り返し行ったことで、児童が学習の見通しをもって、学んだことを振り返って次の学習につなげようとする姿が見られるようになってきた。リーフレットを作るという学習や端末を使って文章を書くという活動は、児童にとってあまり経験のないものであり、楽しさと同時に不安を感じさせるものでもあった。そこで、「協働を促す学習形態の工夫」を行うことで、そうした児童の不安を和らげ、意欲を持続しながら学習を進める児童の姿が多く見られるようになったと考える。また、「学習状況に応じた支援の充実」を図ったことにより、児童が粘り強く学習に取り組み、自身の力で学習課題を解決しようとする姿が見られるようになった。このような主体的に学ぶ姿が見られたことは本研究の成果である。

児童が作成したリーフレットを読んだ感想を保護者からいただくことができた。「魅力を伝えたいという気持ちがよく表れていて、分かりやすく見やすいリーフレットでした。」「リーフレットを読んで、実物を見たくくなりました。」など、児童の取組を称賛するものが多く見られた。これらの言葉は、児童の思いが結実したものであり、児童一人一人が主体的に学習に臨んだ何よりの成果であると考えている。

以上のことから、本研究において講じた手立ては、児童の主体的な学びを実現する授業改善につなげるのに有効であったと考える。

2 今後の課題

本実践では、「中間の評価の段階」において「会社」内で交流を行ったが、「会社」の仲間同士は口頭でのやり取りで内容を理解していたため、互いの文章に対して効果的な助言ができなかったように思われた。今後は、交流の仕方を工夫していくことが必要である。

また、国語科の他の領域でも児童が自己調整しながら学べるように支援の質を高めたり幅を広げたりすることによって、授業改善を進めていくことも必要である。

本実践において、国語科「書くこと」における指導事項の指導に不十分な点があった。指導時間を十分に確保できなかったのは、教師が端末のトラブルへの対応や使い方の支援に時間をかけてしまったことが一因として考えられる。端末の操作については、カリキュラムマネジメントの視点から、国語科以外の教科でも学びを生かしていくことで解決できるものとする。

<引用・参考文献>

市川伸一 (2014). 学力と学習支援の心理学 放送大学教育振興会

群馬県 (2021). 群馬県ふるさと伝統工芸品パンフレット

群馬県教育委員会義務教育課 (2019). はばたく群馬の指導プランⅡ

佐藤浩一 (2014). 学習支援のツボー認知心理学者が教室で考えたこと 北大路書房

澤井陽介 (2017). 授業の見方 「主体的・対話的で深い学び」の授業改善 東洋館出版社

三宮真智子 (2018). メタ認知で〈学ぶ力〉を高める 認知心理学が解き明かす効果的学習法 北大路書房

文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 国語編 東洋館出版社

文部科学省 (2021). 学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料

文部科学省国立教育政策研究所 (2020). 主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について

<https://www.nier.go.jp>

【資料1】「伝統工芸のよさを伝えよう」 指導と評価の計画(全9時間計画)

単元の評価規準	
知識・技能	①比較や分類の仕方、必要な語句などの書きため方、引用の仕方や出典の示し方、辞書や事典の使い方を理解し使っている。(2)イ
思考・判断・表現	①自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫している。(1)ウ ②間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確認めたりして、文や文章を整えている。(1)エ
主体的に学習に取り組む態度	①進んで自分の考えとそれを支える理由や事例との関係の書き表し方を工夫しようとし、学習の見通しをもって、調べて分かったことなどをまとめて書こうとしている。

過程	時間	○ねらい めあて	☆振り返り (意識)	評価項目 (評価方法)
つかむ	1	単元の導入の段階 【手立てア 単元の構成の工夫】 【手立てイ 協働を促す学習形態の工夫】 【手立てウ 学習状況に応じた支援の充実】 ○教師が作成したリーフレットを紹介し、群馬県の伝統工芸についての関心を高め、それを基にリーフレットのつくりを考えること通して、学習の見通しをもつことができる。	☆家族に伝えたい伝統工芸を見付けることができた。 ☆群馬県の伝統工芸の魅力が伝わるリーフレットを作りたい。	・態① (観察・発言・記述) 今後の学習の見通しをもち、リーフレットを作ることに興味や関心をもっている。
	2	リーフレットを作って、群馬県の伝統工芸の魅力を家族に伝えよう。 家族に伝えたい伝統工芸を決め、リーフレットを作るために、これからどんな学習をしていけばよいか考えよう。	☆リーフレットにどんなことを書けばよいかよくわかった。	
追究する	3	児童が自ら学ぶ段階① 【手立てア 単元の構成の工夫】 【手立てイ 協働を促す学習形態の工夫】 【手立てウ 学習状況に応じた支援の充実】 ○百科事典やインターネットで調べて分かったことを要約することで、伝えたい伝統工芸の魅力を整理する。	☆百科事典で○○について調べてみたら魅力がよくなった。 ☆インターネットを使ったらたくさん情報がありすぎてまとめるのが難しかった。	○知①(記述) 調べた情報を、「魅力を家族に伝える」という目的に応じて整理している。 ・態①(観察・記述) 選んだ伝統工芸について進んで調べている。

		伝統工芸について調べ、伝えたい魅力を整理しよう。		
4	児童が自ら学ぶ段階① 【手立てア 単元の構成の工夫】 【手立てイ 協働を促す学習形態の工夫】 【手立てウ 学習状況に応じた支援の充実】	○グループで相談しながら、伝統工芸について調べたことを要約したり、文章の組み立てを考えたりすることを通して、伝統工芸の魅力が伝わるように書き表し方を工夫してリーフレットを作る。	☆知らせたい伝統工芸の魅力を要約すると「中」の部分に書く内容になるな。 ☆組み立てを考えると、「初め」「中」「終わり」に書くことが決まるな。 ☆具体的な例を入れると、伝統工芸の魅力が伝わりやすくなるな。	・思①(記述) 調べたことを基に、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫しながら書いている。 ・態①(観察・記述) 振り返ったことを次時のめあてにつなげて見直しをもって粘り強く学習している。
5		○グループで相談しながら、伝統工芸について調べたことを要約したり、文章の組み立てを考えたりすることを通して、伝統工芸の魅力が伝わるように書き表し方を工夫してリーフレットを作る。		
6		家族に伝統工芸の魅力を伝えるリーフレットを作ろう。		
7	中間の評価の段階 【手立てア 単元の構成の工夫】 【手立てイ 協働を促す学習形態の工夫】 【手立てウ 学習状況に応じた支援の充実】	○グループでリーフレットを読み比べることを通して、間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確認めたりする。 友達のものと自分のものを比べて読み、よりよいリーフレットにする書き方を見つけよう。	☆自分が伝えたい理由を書いたり、具体的な例を写真と関連させたりして文章に書くことよいのだな。	○思②(記述) 間違いを正したり、相手や目的を意識した表現になっているかを確認めたりして、文や文章を整えている。 ・態① (観察・発言・記述) 友達のリーフレットを読み、リーフレット作りに生かそうとしている。
8	児童が自ら学ぶ段階② 【手立てア 単元の構成の工夫】 【手立てイ 協働を促す学習形態の工夫】 【手立てウ 学習状況に応じた支援の充実】	○友達からの助言を基にしてリーフレットを見直し、リーフレットの文章を整える。 リーフレットを完成させよう。	☆理由や例を使って分かりやすく文章を書くことができた。	○思①(記述) 調べたことを基に、自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にして、書き表し方を工夫しながら書いている。 ・態①(観察・記述) 友達からの助言を

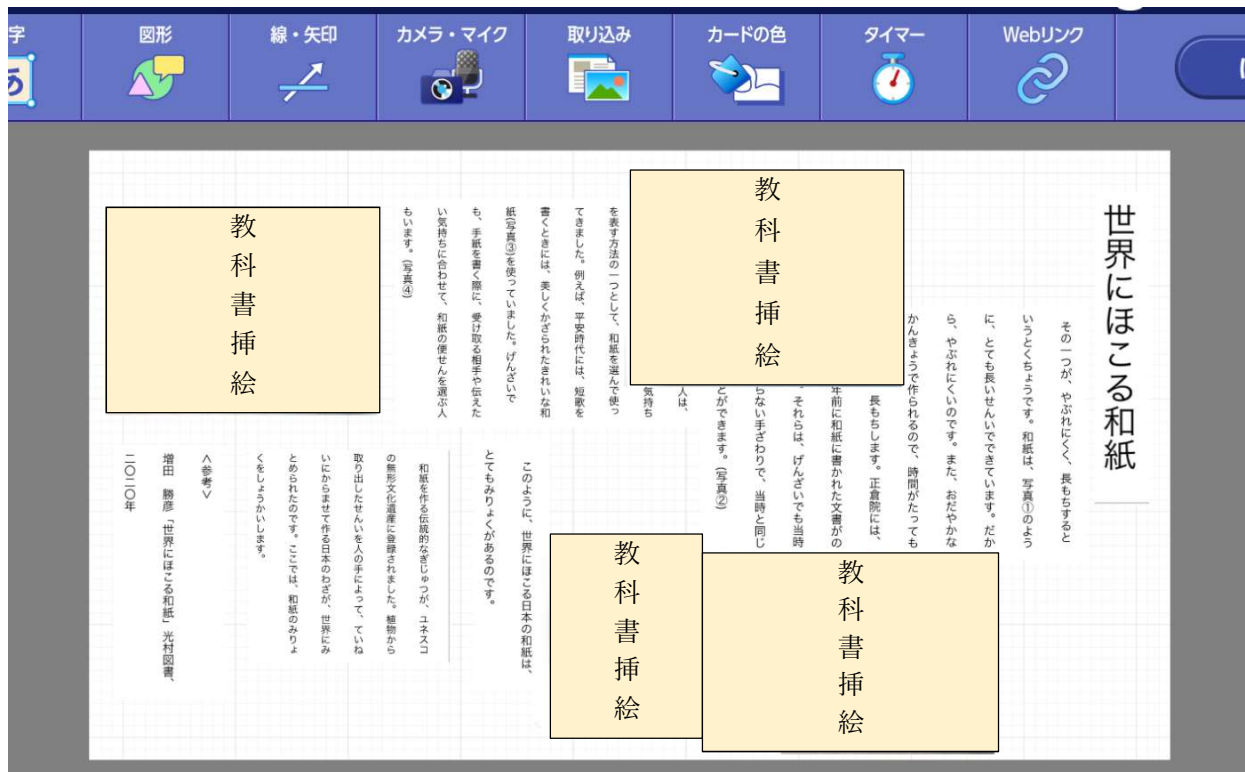
				生かし、よりよいリーフレットを作ろうとしている。
まとめる	9	<p>終末の評価の段階</p> <p>【手立てア 単元の構成の工夫】</p> <p>【手立てイ 協働を促す学習形態の工夫】</p> <p>【手立てウ 学習状況に応じた支援の充実】</p> <p>○友達とリーフレットを読み合い、感想を交流する。</p> <p>友達とリーフレットを読み合い、感想を伝え合おう。</p>	<p>☆書き表し方を工夫して、伝統工芸のよさが伝わるリーフレットを作ることができた。</p>	<p>○態①(記述)</p> <p>単元を通して、自己調整しながら粘り強く学習することができている。</p>

【資料2】学習計画シート（表面）

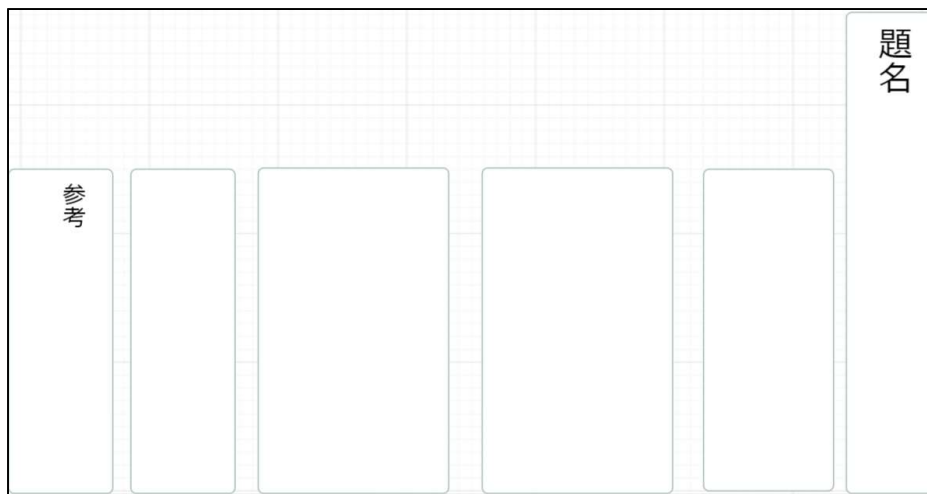
The image shows a learning plan sheet for 'Bodoori' (博多おり紙). The sheet is divided into a grid for planning and a section for the final product. The grid has columns numbered 1 to 9. The final product section includes a title '博多おり紙 使いやすさと美しさ', a title page with illustrations, and a main text area with handwritten notes and diagrams. The notes discuss the history and characteristics of Bodoori paper, such as its use in traditional crafts and its durability. There are also small diagrams showing the paper's texture and how it is used in various applications.

リーフレットのモデル（裏面）

【資料3】リーフレットのパズル（リーフレットの構成、作り方を学ぶ）



【資料4】リーフレット書式（ムーブノート）



↑ 書式 1



↑ 書式 2